

2023 年度 G T セミナー GT サミット 2023③

第339号 2023年8月28日発行

ミマモルジュ挨拶

ホテルに宿泊客の様々な相談や
ご要望に答えるコンシェルジュがいる
ように、保育においても様々な
ご要望や悩みがあると思います。

「見守る」+「コンシェルジュ」=
ミマモルジュとして、保育に関する
ご要望にお応えしていけるよう
活動していきます。

株式会社カグヤ 奥山卓矢

GT サミット③

2023年8月7日～8日に「GTサミット 2023」を開催しました。

全国の GT 園の園長先生方にご参加頂き、数年ぶりにお会いする園長先生方同士の笑顔が会場に溢れていました。

また、GT チャンネルでは、サミットに当日ご参加された方が出演し、当日の様子や感想などについて配信されていますので、併せてチェックしてみてください！

<https://www.youtube.com/watch?v=pZuPgScplcc>

本誌含め、3回に分けて GT サミット 2023 の内容をお送りする
最終回です。

【セミナープログラム】

8月7日（月）セミナー1日目

13:30～15:30	渡邊寛子様（保育園を考える親の会代表）	ご講演
15:30～15:50	休憩	
15:50～17:50	藤森代表	ご講演
18:00	1日目終了	

8月9日（火）セミナー2日目

9:30~11:30	実践発表
11:30~13:00	昼食
13:00~15:00	Q&A
15:00	2日目終了



保育環境研究所ギビングツリー代表 藤森平司氏（新宿せいが子ども園 園長）

—質問①—

卒園児の保護者から、小学校へ行った後の相談を受けることが増えてきました。小学校は今だに担任による対応の違いが大きいうで、授業についていけない子は好きなことをしていい（静かにしてるなら）と放置されたり、すぐに検査や支援級へ勧められてしまうようです。

小学校以降の育ちも支えるには、どのようにしたらいいか悩んでいます。学校はすぐに変わるわけもなく、ただ保護者の話を聞いているだけでは何も変わらず・・・。

小学校に対しては、諦めましたという保護者もいます。藤森先生は、卒園児において、特にみんなと同じようにできない子（浮きこぼれ、落ちこぼれ）の相談を受ける際、保護者の方にどのようなお話をされていますか？また、園としての支援は、どのようなことをされていますか？

よく聞くのは学校に行った時のギャップですね。どうしてこういう保育を考え方かという、1年生の担任をして、多くの子どもたちがギャップを感じて、落ちこぼれが増えたから、こういう保育にしたんですね。なので逆ですね。なぜかという、子どもの発達、今現在を大事にすることが将来につながる。保護者にも冗談で半分ですが、将来、人間は立って歩きます。ハイハイをしていたらギャップを感じませんか？と言っているのと同じですよ。何でハイハイをするか、それは将来立つためですよ。何でこの時期に好きなことをしているのか。将来嫌なことをするからですよ、早く嫌なことをすれば出来るようになるわけではありません。こういう研究もあります。小学校へ行ったら先生の話聞かないといけない。どういう子が聞けることになるかという、自分の話をこの時期に聞いてもらった子ほど、話を聞けるという研究があります。自分の話を聞いてもらえるのは嬉しいですからね。発達は、その時期で早くやるのではなく、十分やることに意味がある。そうじゃないとずっと憧れてしまう。そうすると、今は先生が怒れませんからね。そうすると走り回ったりしてしまう。幼稚園の卒園式に行くと、きちんと座っています。「今日はみんな立派です、何回も練習した成果ですね」と言っていた。その週の土曜日、今度うちの園の卒園式で校長が来ました。「今日が来るまで何回練習しました？」「2回！」。何で2回でもこんな立派なのか、それは先生たちがみんなを信じているからという話をした。学校へ行って入学式に参加すると、うちの卒園児は変わりません。きちんと注意され、きちんとしているわけではないので、あまり変わらない。幼稚園出身の子は、立ち上がった、酷い。すごい注意されてきた子は座ってられない。先生が叱らないと思った瞬間にすごいですね。それでこういう保育を考えました。学校の先生たちは発達のことをあまり分かっていないので、ギャップはあるが、中学年くらいになるとよくなるので、それくらいまでは我慢。時代で、もうすぐ学校も変わりますというしかないですよ。だからと言って、私は就学前に勝手に走り回る、動き回ることを許すことはしません。きちんとすべきことはする。ただし叱られてする子にしない。理想的なことがあったが、345でお集まりの時に、動き回っている子がいた。そしたら、他の子が、「聞こえないから、少し黙っていてよ！」と注意した。騒がしくて困るのは先生ではなくて、聞こうとする子どもですね。その子が注意することで、どちらも必要です。言える子にしないといけない。たまたま東京都の課長さんが見えた時に、1歳児の見学で先生が前で紙芝居をしていた。1歳児でも裾を引っ張って座らせていた、それは見えないからです。という風にして何で座らないといけないのか、注意されてではないですよ。聞くのに聞けない、見るのに見えないからです。自分たちで気づけるような保育はしないといけないと思います。自分勝手にするこ

とがいいわけではないです。そういう子どもたちを育てていくことだと思います。学校によってあるが、担任にもよる。ですから、あまり一人担任が好きじゃないのは担任によっては、筆箱がちょっとでも曲がっていると注意されるとかある。

—質問②—

これからの保育所はどのような位置づけ、在り方が望まれるか。保育所は、福祉施設であり親の就労支援をしつつも子どもの育ちを支える教育的部分も大切であるように、様々な要因が絡み合っていると感じます。これからの世界を担っていく人を育成する保育所のこれからの在り方について、藤森先生のお考えを伺いたいです。

2つあると思います。うちの職員がチャット GPT に、これからの保育士に未来はあるかを聞いたら、「ますます重要になってくるでしょう。1 つは消費社会になり、人口減少社会になると、すべて女性は働かないといけない。家で育てることは無理になるでしょう。消費社会・人口減少社会になると、社会知性を学ぶ機会が減ってくるので、ますます重要になるでしょう」と答えていた。保育士はますます重要になると答えたそうです。いくら子どものためと言って、親のためもあります。親が女性もこれからは働かないといけない位、人が少なくなり、子どもはどうするか。一人の親が働くために一人のベビーシッターが働いていては変わらないですね、集団で見る施設が必要になり、同時に集団の意味、子どもの育ちの意味を両面から必要だと思います。

—質問③—

乳児保育の重要性を常に藤森先生は訴えておられますが、学童期の教育・保育についてはどのように考えておられますか？以前は新宿せいがこども園さんでも学童保育をされていたと昨日の研修で渡邊先生が仰っていましたが、学童保育をされていた際に大切にされていたことを教えていただけると幸いです。

先ほど言った学童保育の時間は、昔は自由遊びの時間帯ですね。それが自然には無理であれば、学童はそこに近づく。私がやっているときは例えば、月案は子どもたちが話し合って決めていました。ある子が来月こんなことをしたいと言ったら、ひらめきボックスというのがあって、そこに入れて先生が貼り出します。賛成の子はそれを月案会議に諮って入れていきます。その中で一番人気だったのが、家のおもちゃを持ってきてもいい日。子どもたちが家のおもちゃを持ってくるので、逆に持ってきていい日を決めたら大喜びだが、他の日に持ってこなくなった。もう一つが先生をやっつける。山下君が相手をしてやられまいとして、子どもたちは作戦を立ててやっていました。学校の大人がコントロールするのではなく、自分たちで作っていく。クラブ活動も、こんなことをしたいということを学童でクラブがありました。ある時に問題が起きた。ある親から18時になったら返してくださいと言われていたのを、先生がつい忘れて、時間が過ぎてしまった。そのお父さんが苦情を言ってきた。「なんで管理しないか！」と謝ったが保護者会で立ち上がって、こんなことがあったと話をした。私はそこまでは謝っていたが、うちの子は学童ではないが、友達に遊びに行く時に、何時までに帰ってきなさいと本人に言って、帰ったきた。この年齢まで、周りが返さないまで、子どもが育っていない方が問題ではないですか？と言ったことがあって、もう一つ、誰が何時に帰るようなものを作った。自分で気づいて帰るようになったと言って、他の子が気づいていえばいいと思ったら、他の学童から着た子は、返る時間になったよと、その子に言うのではなくて、先生に言いに来ていた。言えればいいのにとと思うが。自分で管理するとか、本人で管理するとか、置き去り事件でもそうだが、チェックのほかに、子どもたちでチェックすることも入れないといけない。寝ているのを知らん顔しているような子どもを作ってはまずいと思いますね。「もう着

いたよ」と、起こすようなきゃじゃなきゃ。うちは散歩へ行く時、クラスで人数チェックをして、職員室で第三者が確認し、最後は子ども同士で隣の子がいるかチェックする方法を取っています。学童でいろいろなことをやっています。親から人気があったが、問題は片づけないことがあって、どこまで一体片づけないかやってみようと思って、日々、汚いままで臭くなって、子どもは気づかない。多分、全部注意され片づけていたからでしょうが、そういったことをしていました。これからの問題があるのは、ドイツは全て半日制です。当然学童がないとだめです、スポーツクラブに行く子は別だが、学童がないとだめだったら、学校の生徒と同数だけ学童にいと想定しないとだめですね。同じくらいの人数が学童にいと想定して作らないといけない。それだからどうするか、子どもが帰った後の教室で学童が出来るんです。教室で過ごすことが出来ますが、日本では教員が貸さないですからね。そのまま学校を使えばいいと思うので、日本もそうしたらいいと思う。子どもの私物はロッカーに入れればいいですからね。

—質問④—

渡邊さんが講演の中で話していた、「仕事の内容には興味関心がなく、ただプライベートを充実させたい、もっと休みたい、遊びたい」という若手社員は、一般企業のみならず、保育士にも現れてきているように思えます。いくら価値観を深掘りしてみても、取りつくしまもない気さえしますが、藤森先生なら、そんな職員に対してどうアプローチしますか？お聞きする相手が違うかもしれませんが、とても興味があるのでお尋ね致します。まずそれぞれの価値観なので、保育士になってほしくないと思ってしまうが、逆にこんな面白いことをやらないのは損だろうと見せつける。子どもがいるとこんなに楽しい。行事が面白いとわいわいやってしまう。うちの場合は帰っても構わないですし、子どもが小さいと帰らないといけない場合もあるが、残った人が損するのではなくて得する。こんな楽しいことがやれるというようなことをしますね。職員の本音を聞いてみないと分からないが、行事なんかは確かに大変かもしれませんが、わいわいと学園祭の準備のようで楽しかった。新卒で入った子たちが大学の時は学園祭がなくて面白かったと言っていた。自分が率先して楽しめばいいし、いなければ自分一人でもいいと思ってしまう。そこは下町っぽいが、楽しいことを見せることですかね。

—質問⑤—

お陰様で学年や担任の枠を外したチームでの保育ができるようになりました。しかしながら、子ども達の遊びを広げ深めていく為の一工夫の力を出し合えず、担任としての意識に取られてしまうという職員が多くいます。また、保護者からも「担任の先生から話を聞きたかった」と言われることがあります。発信の仕方の不十分さだと思うのですが、今後担任表記をやめてグループ担当表記にするのはどうか、ゾーン担当制にするのはどうかと思っているのですが、藤森先生のお考えをお聞きしたく、宜しくお願いします。私の園は年齢ごとに担任はいます。これはそのクラスを担当する職員ではなくて、そのクラスの保護者に担当する職員なので、保護者からすれば誰が担任かはっきりしています。具合が悪い場合は担任につながります。だからと言って、クラスを保育するとはいいません、保育は得意な人がやったり、色々な人がやりますがデータとしては、担任に集まるようにしています。親は担任に聞けばデータが揃っているようにしているので、4月にはこのクラスが担任ですと決めます。普段の保育では、そういうことにはとらわれないですね。

—質問⑥—

藤森先生が組織やチームを編成する際やチームが動き始めている時にどのようなことを意識されているか教えてください。

基本的には、保育者を信じてと言ったらきれいだが、私より子どものことを考えているので、下手な口出しはしないようにしています。例えばこういうことがありました。私は、給食を無理やり食べさせなくてもいいという考え方が、その子に一口でも食べなさいと注意しているのを見た時に、私が思っている以上に、子どものことを知っているのだろう。その子にとっては、そういう言い方をした方がいいのだろうとあまり違うと言いません。こういうことがありました。見学者から、345へ行ったら、子どもが折り紙を頂戴と言ったら、先生が2枚だけだよと言っていた。

「せいがでは、使う枚数を制限しているのですか？」と聞かれた。私の考えでは、使いたいだけ使っていいと思っているので、ふと制限しているのかなと思った。だけどすぐ注意するのではなく、見学者に言われどう返答していいか困ったという話をしたら職員から、「折り紙を使うにしても、私たちは意図を持っています。今週は、見通しを立てさせることが意図なので、2枚で何が折れるか、見通しを持たせるため」と聞いたとき、注意しなくてよかったと思った。ちょっとただけで言うものではない。何か意味があるのだろうなと思うようにしています。こちらから見ただけではなくて、何か考えているのだろうと思っている。ただ踏み切らない時には背中を押すことがあります。まだしていないけど理由はあるの？と聞くことがある。遅刻する職員がいたときに、また寝坊してではなくて、体の具合でも悪いの？と聞くようにしています。怒られると思っていたのが、そういう言い方をされるとショックだと言っていた。相手の身になって考えてあげると向こうが気まずいので、出来るだけ何か意図があるのだろうなと思ってあげるようにしています。

—質問⑦—

愛着障害の子どもが増えているように思います。愛着障害と発達障害の区別が難しく感じています。

見分けるポイントがありましたら教えて下さい。

見分けるポイントは分かりませんが、新書で「愛着障害」という本があります。あれを私も読んだのだが、愛着障害は人間関係の不安とかの障害ですね。いつも不安でいることがあって、日本はどうしても母親に戻そうとするが、変な母親なら、いい保育士の方が影響を与えることが出来るという研究がある。親のせいではなく、自分が愛着存在になってあげたらいいと思います。発達障害とは、それとが違うと思うので、それをやってみてどういう行動に変わるかだと思います。受け入れてあげる経験、自分の存在を受け入れてもらう経験が割と少ないと愛着障害になる可能性がある。子どもならいいが、せいがの森の時に愛着障害だろうと思う親がいた。子どもに乱暴するとか、他の子を殴ったりするので、その母親を呼んで話をした。その親が、「生活指導主任の先生から怒られたみたい」という言い方をしたが、家に帰り、友達に園長先生どうだった？と聞かれ、こうだったと言ったら、その友達が「そんなの嘘、人のためにいっこないんだから、口先だけ」と言って、次の日戻ってしまった。人を信じてこなかった人には、なかなか難しいですね。ある時に、親たちが、その親を転園させてほしい、自分の子が危害を被るからと言われた時に私は、「お母さんたち、皆さんはどこへ行っても大丈夫だけど、あのお母さんはうちじゃなきゃ直せない。皆さんの方が、どこへ行っても大丈夫だからと転園してください」と言ったが、そのお母さんは、いずらくてやめてしまって、その子どもは警察沙汰になって、他の親たちが、あのまま、せいがにいたらと言っていました。そこまで引き留めることが出来ないですが、理解してあげる努力はしています。

—質問⑧—

昨日のご講演のアロマザリングとアタッチメント理論のお話は、愛着形成の相手が母親に限られる（いわゆるワンオペ）という行き過ぎたアタッチメント理論に警鐘を鳴らすご発言だったと理解しています。

ボウルビィが生きた文化や時代と現代の日本社会とでは、母親が置かれている社会環境が随分違うため、アタッチメント理論についても現代の環境に合わせて解釈を柔軟に変えていく必要があると感じました。

そこでお尋ねしたいのは、0歳児への関わり方について、担当制ではなくチームで保育を行うことが、アロマザリングの見地のみならずアタッチメント理論の見地からも理に合っているんだという、論拠が何かございましたら、教えていただければ幸いです。

施設におけるアタッチメントは、私からすると遠藤先生が言う安心基地だと思っています。安心基地は、負の状況に陥った時に、いつでも受け止めてくれる人がいる確信ですね。前提が子ども同士で過ごしたり、一人で過ごして負の状況に陥った時に、駆け込める場所の意味ですね。ですから私は、駆け込める場所が子どもが一人に決めても構いません。その人が受け止めてあげればいいと思います。安心基地としての存在は、子どもが求めてきたらチームで分担するのではなくて、一人決めたら一人でいいと思います。私の言う担当制は年度初めに、あなたはこの子たちの担当よと決めてしまうのが危険というのは、気が合わなかったらどうするのだろう。保育時間が長い時に、どうするのだろうとある。子どもはこの人と決めたら、優先順位があると言われています。子どもが決めるなら、1人として決めるいすね、この人がいない時はこの人、この時はこの人と決めるのが、園におけるアタッチメント形成だと思っています。スウェーデンの保育を見た時に、慣らし保育・慣れ保育期間はどういう期間かという、園の中の職員の中で、誰と気が合うのが見つける期間という言い方をします。決めたら、子どもはその先生から広がっていくと言われています。家におけるアタッチメントは、いわゆるくっつき行動。いつも一緒にいたり、触れ合ったりして、安心感を持つということです。遠藤先生の研究でもあるのですが、施設は、家程くっ付き行動を示さないと言われています。安心基地としての存在は、園においてはお母さん意外、必ずしも人ではなくて、ぬいぐるみや毛布、物に求める場合もあります。いつも同じタオルを持つとかということもあると言われています。安心する意味が、アタッチメントとしてあります。家ではくっ付き行動で安心するという意味があります。施設におけるアタッチメントと、家におけるアタッチメントは種類が違っているとされています。園がお母さんのように、お母さんの代わりも無理。お母さんはお母さんとして愛着形成をしてほしい。ただし、それが出来ない場合なら、お母さんに代わる誰かがいたらいいというのがアロマザリングですね。それはもともとはお母さんなんですね、それか両親、アロペアリング。元々家だったらそうですね、それが無理なら変わることが出来る。虐待がひどかったりしたら、母子分離をした方がいい。早くはかった方がいいと言われています。日本は7、8割家に帰そうとしてしまう。外国は一人の権利として、親から離すことをします。そういう意味で、子どもの権利条約が虐待から守られる権利は、親からの虐待からも子どもを守られないといけない。親に帰したら、子どもの権利条約に違反するわけです。親からも子どもを守る権利があるわけですから。子どもの家庭庁の時に、「家庭」が入ったことに随分反対したのはそういうことですね。日本は、家庭とくっついてしまう。子ども庁にして、子どもにとって親がどういう存在か、家庭がどういう存在かを議論したらいいが、日本はどうしても親の所有物かのように思ってしまうことがあることが危惧されています。

—質問⑨—

教育は、その時代の国の政策によって大きく左右されることが多く、一斉保育も高度成長期といった時代背景においては適した方策だったのかもしれませんが。しかし、今の技術進歩などをみても分かるように個の考えを持ちながら種々の考えなどを傾聴し、しなやかに早く判断し協同すべき際は組織・会社等の壁を無くし共通の目標のために協力し進んで行くのが普通の方法ですが、幼稚園、認定子ども園、企業型保育園など子どもに種々のタイプはないのに、親の仕事等による要因で分類され、色々と種々の制度内容も変わり、また、委託事業ではあるのですが事業主側の事業の展開の選択も制限されるといったようないわゆる外的要因に対して、藤森先生としては、どう感じ、今までに苦悩してきた事も非常に多かったと思いますが、期待する未来の姿みたいなものを可能であればお聞きしたいと思います。

—質問⑩—

今まで、保育所保育指針をはじめ、色々な書類では「子ども」と書くことが多かったのですが、こども家庭庁、こども基本法、など、「子ども」ではなく、「子供」でもなく、ひらがなでの「こども」という表記について気になっていました。小さなことですがすみません☺️💧今後、国が「こども」という存在を、大人の「供え物」でなく、ひとくくりのイメージの例えば「男ども、女ども」(笑)でなく、まるっと「こども」そのものを大事にしていこうよとメッセージを込めているのかしら、そうでもないのかしら、と考えていました。

的はずれかもしれませんが。お時間が余ったら、で結構です〜😊

基本はインクルージョン・インクルーシブと思うのが、今まで社会から除外されていた人たちも、社会の中に取り戻そう、ということがインクルージョンで、日本ではよく障害のことによく使うことが多いが、そうではなくて、社会から除外されている人を、もう一度一緒になろうということなので、その一つが私は異年齢の一つの理由で、年齢で子どもを分けたり、年齢で何歳だからダメではなくて、あなたとして何が必要なのかという捉え方をしたいことで、男だから女だからじゃないし、障害かどうかではなくて、一人の子どもとしてみてあげることだと年齢で見ることをやめましょう、ということがあって私は、インクルーシブの中の一つとしての異年齢で、別に異年齢にしたいわけではなくて、年齢で子どもを刷り込まない。今どんな価値を持っているか、その子なりの価値を持っている見方をしましょう。学校教育の中ではなかなか難しいのがあったが、今後は一人ひとりタブレットを持たせることで、それが少し可能になると言われています。タブレットを一人一つ持つことなく、個別のニーズに合わせる事が出来るという意味の使い方が模索されています。自分から学ぼうとする意欲、自分から学ぶことが根底にないとダメです。そういうようなことを思ったときに、卒園した子が、他の子に対してあまり差別しない、不登校にしても、何にしてもウェルカムで迎えてくれるという評価があった時に、私たちが教えてもないのに、何でそうかと思うと、異年齢で保育をしているから。年齢で分けてなくて、一人の個人としてみていくことを小さいうちからしていく、ということだと思います。直接関係ないかもしれませんが、これからの時代はインクルーシブな保育をもっと広い意味で考えていくことになると思います。

※質問⑨⑩についてはまとめてお答えいただいています。